語学教育研究論叢第 25 号

“动词＋上来／去”と空間詞の関係について

高橋　弥守彦

On the Relationship between “Verb+*shanglai/qu*” and Spatial Noun

TAKAHASHI Yasuhiko

内容提要：

本文从短语论的观点来讨论“动词＋上来，动词＋上去”和空间词之间的关系。“动词＋上来，动词＋上去”中的动词表示运动的方式，所以，我们叫做样态性移动动词。“上”表示位置性移动，所以，我们叫做位置性移动动词。“来／去”表示趋向移动，所以，我们叫做趋向性移动动词。我们将一种表示处所的词叫做空间词，将空间词和它构成的短语叫做空间词语；把移动动词分为三类(样态性移动动词，位置性移动动词，趋向性移动动词)，空间词分为五类(专有名词，处所名词，方位词，指示代词，物品名词)，其中处所名词从它们的意义特点来又分为六类(自然地理性名词，人工修建性名词，工作单位性名词，行政区域性名词，全体处所性名词，部分处所性名词)。

在“动词＋上来／去”和名词构成的结构里有“动词＋上＋空间词＋来／去”。我们从短语论的角度通过分析“动词＋上＋空间词＋来／去”里的“动词＋上”和空间词以及“来／去”之间的关系，笔者认为它们并不可以随意搭配，它们的搭配是有语法规则可寻的。

キーワード：むすびつき　位置移動の動詞　趨向移動の動詞　介詞　空間詞

1. はじめに

先行研究によれば、下記に挙げる例文のように、“上”と空間詞（「“上”＋空間詞」）とで作る“上”には動詞(例 1)と趨向動詞(例 2)という 2 説がある。“上”と空間詞と“来 / 去”（「“上”＋空間詞＋“来 / 去”」）とで作る“上”にも動詞(例 3)と介詞(例 4)という 2 説がある。“上来，上去”と空間詞（「“上”＋空間詞＋“来 / 去”」）とで作る“上来”“上去”にも動詞(例 5, 6)と趨向動詞(例 7, 8)という 2 説がある。これらはいずれも文中における意味と位置（文法的なふるまい）とによって品詞分類されている。

（1）你上哪儿？（動詞“上”：『現代中国語辞典』p. 1076）
　　きみはどこに行くのか。(同上)

（2）汽车开上了盘山公路。(趨向動詞“上”：『八百詞』p. 304)
　　車はまがりくねった山道に入っていった。(同上)

（3）我刚才上楼去了。(動詞“上”：『八百詞』p. 302)
　　さっき二階へ行って来たところだ。(同上)

（4）你上哪里去？（介詞“上”：『現代中国語辞典』p. 1076）
　　どこへ行きますか。(同上)

（5）你什么时候上北京来呀？(動詞“上来”：『八百詞』p. 304)
　　君はいつ北京へ来ますか。(同上)

（6）你上哪儿去？(動詞“上去”：『八百詞』p. 304)
　　どこへ行くの。(同上)

（7）一群孩子跑上山来。(趨向動詞“上来”：『八百詞』p. 305)
　　子どもたちの一群が山へかけ登って来た。(同上)
　　子どもたちが一群となって山を駆け登って来た。(筆者訳)

（8）枪支弹药送上前线去了。(趨向動詞“上去”：『八百詞』p. 305)
　　銃や弾薬を前線まで届けた。(同上)

これらの説に対して、筆者は異なる考えを持っている。たとえば、例(7)の“跑上山来”であれば、“跑上来”を 3 つの移動動詞からなる動詞連語とみなし、それぞれの意味的な特徴から、この 3 類の移動動詞を有様（ありさま）移

動の動詞“跑”・位置移動の動詞“上”・趨向移動の動詞“来”と名付けている[1)]。本稿では、移動動詞をこれら 3 類に分け、連語論の立場から“动词＋上来”“动词＋上去”と空間詞（「動詞＋“上”　＋空間詞＋“来／去”」）との関係について述べる。

ところで、位置移動の動詞“上”は名詞とともに連語を作り、「異領域のくみあわせ」を作る[2)]。連語内部において名詞が場所を表すと、「空間領域のくみあわせ」を作る。一般的に位置移動の動詞“上”と空間詞とで作る「空間領域のくみあわせ」には次の 4 構造がある。

ⅰ.「“上”＋空間詞」

ⅱ.「動詞＋“上”　＋空間詞」

ⅲ.「“上”＋空間詞＋“来／去”」

ⅳ.「動詞＋“上”　＋空間詞＋“来／去”」

筆者は、連語論の立場から、連語論的な意味と構造的なタイプとにより、上記に挙げる 4 構造のうち、「“上”＋空間詞」「動詞＋“上”＋空間詞」「“上”＋空間詞＋“来／去”」3 構造をすでに分析し、これらのくみあわせで作る各むすびつきを明らかにしている。また、各むすびつきに用いられている動詞の機能と位置移動の動詞“上”と空間詞のプロトタイプ的な意味とバリエーション的な意味、および趨向移動の動詞“来／去”の機能を明らかにしている。さらに、「“上”＋空間詞＋“来／去”」構造は、連語論の立場から「動詞“上”＋空間詞＋趨向移動の動詞“来／去”」と「介詞“上”＋空間詞＋趨向移動の動詞“来／去”」との 2 つの構造[3)]に分かれるとし、それぞれの例文中の“上”がなぜ動詞と介詞とに分かれるのかも連語の表す各むすびつきの中で説明している。

語順については、位置移動の動詞“上”の作る連語内部の構造は“上”の客体が空間詞であれば、「有様（移動）＋位置移動＋空間詞＋趨向移動」であり、この構造全体で一般に主体の行う運動の順序を表し主体の移り動きを明らかにしている。

“动词＋上来”“动词＋上去”と空間詞とは、一般に「動詞＋“上”＋空間

詞＋“来／去”」の構造によって、次のような文を作る。

（9）河水漫上岸来了。(『八百詞』p. 305)

川の水が岸まであふれてきた。(同上)

(10) 一纵身跳上马去。(『八百詞』p. 305)

ぱっと馬に跳び乗った。(同上)

(11) 我看见一个女同志跳上台来。(《趋向补语通释》p. 117)

女性が一人壇上に飛び上がるのを目にした。(筆者訳)

(12) 他合了一会儿眼，才慢慢走上楼去，睡在地板上。(《趋向补语通释》p. 127)

彼はしばらく目を閉じてから、ゆっくりと歩いて階段を上がっていき、床に寝た。(筆者訳)

本稿では連語論の立場から、本構造「動詞＋“上”＋空間詞＋“来／去”」で作る連語がどのような連語論的な意味の「むすびつき」を作るのかを検討し、むすびつきの違いにより、“动词＋上”と空間詞の基本義と派生義および“来／去”の機能を明らかにする。

2. “动词＋上来”“动词＋上去”と空間詞の作るくみあわせ

位置移動の動詞“上”は、有様(移動)の動詞や趨向移動の動詞“来／去”とともに動詞連語「動詞＋“上来／去”」を作る。動詞連語「動詞＋“上来／去”」を名詞とともに用いると、領域ごとの「異領域のくみあわせ＋来／去」を作る。異領域のくみあわせを作る連語内部において名詞が場所を表すと、「(有様移動の）動詞＋“上”＋空間詞＋“来／去”」の構造で「空間領域のくみあわせ＋来／去」を作る。空間領域のくみあわせを連語論的な意味と構造的なタイプによって分類すると、以下のいくつかのむすびつきに分けることができる。

2.1.「動詞＋“上”＋空間詞＋“来”」の構造

本構造「(有様移動の）動詞＋“上”＋空間詞＋“来”」は一般に次のような文中に用いられ、連語論的な意味を表すいくつかのむすびつきを作る。

(13) 等他门一说出价钱，老先生又气得摇着头，走上山来，原来比张嫂的价目还大。(《关于女人》)

言い値を聞いた李さんはまた腹をたて、首をふりふり山をのぼってきた。はなから、張嫂さんより高いのだ。(『女の人について』)

(14) 大人们不知出了什么事，一个个急匆匆奔上阳台来，杨扬的爸爸走在头里。(《童话》p. 186)

大人たちは何が起こったのか分からなかった。一人一人慌ただしくベランダにやってきた。楊楊のおとうさんは先頭の中にいた。(筆者訳)

(15) 等他爬上岸来，月光被水波扯得像千条金蛇，蜿蜿蜒蜒缠缠绕绕，绕来绕去，又聚拢到一快儿——还是一轮闪动的月影，腆着银盘似的圆脸，调皮地朝他笑。(《童话》p. 254)

彼が岸に這い上がると、月光は波によって数え切れないほどの黄金のヘビのように引き裂かれた。くねくねとからみつき、またひとつにまとまった。——やはり丸く輝く月だ。銀盤のような丸い顔は彼をおちょくるかのように笑いかけている。(筆者訳)

(16) 急急跑上前来的道静，看出题踢倒警察的是卢嘉川。(《青春之歌》)

かけつけた道静は、その警官を蹴とばしたのが、芦嘉川だと知った。(同上)

(17) 曹县长手捋着八字胡，笑盈盈地走上前来，……(《红高粱》)

曹県長が八字髭をひねりながら、にこにこして進み出た。……(『赤い高粱』)

(18) 撒完了尿，余占鳌对着我奶奶咧嘴一笑，摇摇晃晃走上前来。(《红高粱》)

小便をしおえると、余占鰲は祖母ににやりと笑いかけ、よろよろと近づいてきた。(『赤い高粱』)

(19) 郝秘书的前任秘书听了有关他的风言风语，专门找上门来，……(『人民』97-7-87)

この噂を聞いた郝平の前任者が、わざわざ彼を訪ねてきた。……(同上)

(20) 年轻的猎人一听到那只最可怕的狼找上门来了，吓得浑身直发抖。(《童话》 p.159)

若い猟師は例の恐ろしい狼がやってきたことを聞くやいなや、体中がぶるぶると震えるほど恐れた。(筆者訳)

(21) 一天早饭后，王五老汉正在炕上喝茶，有个南方口音的人找上门来，……(『人民』90-1-98)

ある日、朝食後、王五おやじがオンドルにすわって茶を飲んでいると、南方なまりの男が訪ねてきた。……(同上)

(22) 幸亏鸭子赶快用嘴把他的尾巴衔住，拖上岸来。要不小青鸟就淹死在水里了。(《童话》 p.86)

幸いなことに、アヒルはくちばしで小さな青い鳥の尻尾をくわえると、岸に引き上げた。さもなければ、小鳥は溺れ死んでしまっただろう。(筆者訳)

(23) 后来她听见阿栗趿着木屐上楼来，一路扑秃扑秃关着灯，她紧张的神经方才渐归松弛。(《顷城之恋》)

やがて阿栗が木のサンダルをつっかけて階段を上がってくる音がし、その途中でパチンパチンと電気を消す音が聞こえると、流蘇の張りつめた神経がようやく緩んだ。(『傾城の恋』)

(24) 再说，有好多他的崇拜者上门来拜师求艺，他要教徒弟，也总得示范几下，没有活蚊子能行吗？ (《童话》 p.944)

それに、芸を身につけるために彼を師として仰ぐたくさんの崇拝者が訪ねてきた。彼が弟子に教えるためには、やはり何度か模範を示してやらなければならなく、生きた蚊が必要であった。(筆者訳)

(25)《童画女王》杂志不见童话奶奶按时寄童话稿，特意派新上任的主编上门来。(《童话》 p.882)

雑誌『動画女王』では童話おばあさんが期日通りに原稿を送ってこ

ないと思い、新任の編集委員長に訪ねさせた。(筆者訳)

上掲の例文に見られるように、本構造「動詞＋“上”＋空間詞＋“来”」のなかで、一般に動詞は運動の方式を表し、“上”は位置移動を表し、名詞は場所を表し、“来”は視点のある移り動きを表す。例(13)から(22)の「動詞＋“上”＋空間詞 ＋“来”」構造は各むすびつきを作る「動詞＋“上”＋空間詞」と視点のある移り動きを表す“来”とに2分割できる。例(23)(24)(25)はひとつの文中に出来事が3つ以上ある場合である。

例(20)(21)の“上门”は連語ではなく離合動詞であるが、基本的な構造は同じである。例(22)の“拖上岸来”は前の分文との関係で、前の分文とともにひとつのむすびつきを作る特殊な例である。例(23)は出来事が3つある連述文(有様“趿着木屐”＋位置移動“上楼”＋趨向移動“来”)であり[4]、例(24)は出来事が 4 つある兼語文(「有様“有好多他的崇拜者”＋位置移動“上门”＋趨向移動“来”＋目的“拜师求艺”」)、例(25)は出来事が3つある兼語文(「有様“派新上任的主编”＋位置移動“上门”＋趨向移動“来”」)である。これらとともに用いる“来”は「来る」の意味を表す視点を含んだ趨向動詞であり、移り動きを表している。以下に連語論的な意味による各むすびつきを分析してみよう。

2.1.1. 空間的な移動のむすびつき

位置移動の動詞“上”の基本義は「下から上に移動する」角度性の移動である。上掲の空間領域のくみあわせの中で、“上”がこの意味で使われているくみあわせは、例(13)の“走上山来”「山をのぼってきた」だけである。“走”は主体のありさまによる移動を表し、“上”は「下から上にのぼる」意味を表している。“上”の対象となる“山”は主体の移動するところである。「“上”＋“山” 」「山をのぼる」は主体の移動を表しているので、連語論的な意味では「空間的な移動のむすびつき」である。空間的な移動のむすびつきに用いる“上”は基本義「下から上に移動する」であり、空間詞は必ず角度性の名詞である。“来”は視点を表す「来る」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、主体の転移性を表している。“来”が転移性を表すときは、たとえば“他

们也走上山来小木屋了。”「彼らも山を登って山小屋に来た」のように、その後に場所名詞を加えることができる。なお、「空間的な移動のむすびつき」は次のように分析できるであろう。

i．空間的な移動のむすびつき：「空間領域のくみあわせ」のなかで、主体がある空間を移動することを「空間的な移動のむすびつき」(例 13)と言う。

有様(移動)の動詞	“上”	空間詞
有様を意味する動詞	位置移動を意味する動詞	場所を意味する名詞

有様移動の動詞：“走”

位置移動の動詞：“上”

場所を意味する名詞：“山”

空間的な移動：“走上山”「山をのぼる」

例(13)の「空間的な移動のむすびつき」を作る連語“走上山”に用いる有様移動の動詞“走”は主体の有様によって移動「歩く」を表している。単語レベルでも連語レベルでも「歩く」の意味を表すので「移動を示す基本動詞」であるが、日本語では訳されていない。位置移動の動詞“上”は「下から上に移動する」基本義としての角度性移動「のぼる」の意味を表している。単語レベルでも連語レベルでも基本義としての角度性移動を表しているので「移動を示す基本動詞」と言える。“上”の対象となる“山”は単語レベルでも連語レベルでも場所を表すので、「場所を示す基本空間詞」と言う。これは形状別に見ると角度性の空間詞である。上掲の「“走”＋“上”＋空間詞」“走上山”に対応する日本語訳「山をのぼる」は“走”が不訳なので「空間的な移動を示せる応用訳」と言う。

2.1.2. 空間的な着点のむすびつき

例(14)の“奔上阳台来”「走ってベランダに上がって来た」のうちの“奔”は主体の有様による移動を表している。“上”は「上がる」の意味だが、「下か

ら上に移動する」の意味を表す基本義ではなく、基本義の一局面「到着する」の意味で用いられているので派生義である。“阳台”は主体の到着するところである。「“上”＋“阳台”」「ベランダに上がる」は主体の到着を表しているので、連語論的な意味では「空間的な着点のむすびつき」である。“来”は「来る」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。例(15)の“爬上岸来”「岸に這い上がる」のうちの“爬”は主体の有様による移動を表している。“上”はやはり「到着する」の意味で用いられているので派生義である。“岸”は場所を表す線上性の名詞であり、主体の到着するところなので、「場所を示す基本空間詞」である。「“上”＋“岸”」「岸にあがる」は主体の到着を表しているので、連語論的な意味では「空間的な着点のむすびつき」である。“来”は「来る」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。“来”が趨向性を表すときは、その後に場所名詞を加えることができない。“来”が転移性を表すときとの違いである。「空間的な着点のむすびつき」は次のように分析できるであろう。

ii．空間的な着点のむすびつき：「空間領域のくみあわせ」のなかで、主体がある空間に到着することを「空間的な着点のむすびつき」(例 14, 15)と言う。

有様(移動)の動詞	“上”	空間詞
有様を意味する動詞	到着を意味する動詞	場所を意味する名詞

有様移動の動詞：“奔, 爬”

位置移動の動詞：“上”

場所を意味する名詞：“阳台，岸”

空間的な着点：“奔上阳台”「走ってベランダに上がる」、“爬上岸”「岸に這い上がる」

例(14)の「空間的な着点のむすびつき」を作る連語“奔上阳台”に用いられている有様移動の動詞“奔”は主体の有様による移動「速く走る」を表してい

る。連語レベルでは「速く走る」の意味で訳されていないので「移動を示せる派生動詞」である。例(15)の“爬上岸”の“爬”は主体の有様による移動「這う」を表している。連語レベルでも「這う」の意味で訳されているので「移動を示す基本動詞」である。“上”の日本語訳に見られる「上がる」は「下から上に移動する」角度性移動を表しているので、単語レベルでみれば基本義である。しかし、連語「“上”＋空間詞」における位置移動の動詞“上”の日本語訳「上がる」は、連語レベルで見る「空間的な着点のむすびつき」のなかで「下から上に移動する」角度性移動を表しているのではなく、その中の一部である到着の局面を表すだけなので、「空間的な着点を示せる派生動詞」と言う。“上”の対象となる“阳台”“岸”は単語レベルでも連語レベルでも場所を表す。このような空間詞を連語論では「場所を示す基本空間詞」と言う。これらの空間詞は形状別に見ると枠内性(“阳台”)と線上性(“岸”)の空間詞に分けられる。上掲の例(14)の「“奔”＋“上”＋空間詞」“奔上阳台”に対応する日本語訳「ベランダに上がる」は“奔”が不訳になっているので「空間的な着点を示せる応用訳」と言う。例(15)の「“爬”＋“上”＋空間詞」“爬上岸”に対応する「岸に這い上がる」は中国語と日本語とが対応しているので、この日本語訳を「空間的な着点を示す基本訳」と言う。

2.1.3. 空間的な移りのむすびつき

例(16)の“跑上前来”「駆けつけた(走って前に来る)」の“跑”は主体の有様による移動を表しているので基本義である。例(17)の“走上前来”「進み出た(歩いて前に出た)」、例(18)の“走上前来”「近づいて(歩いて前に来る)」の“走”は主体の有様による移動を表しているが訳されていない。“上”はいずれも平面性移動による主体の移りを表し、角度から解放されている。これらの用法の“上”は角度性の移動から解放され平面性の移動に移行し、しかも主体の移りを表す意味で使われている。移りを表す“上”も派生義である。方位詞“前”は主体の移るところである。“上前”「前に出る」は主体の移りを表しているので、連語論的な意味では「空間的な移りのむすびつき」である。“来”

は「来る」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。

iii．空間的な移りのむすびつき：「空間領域のくみあわせ」のなかで、主体がある空間に移ることを「空間的な移りのむすびつき」(例16, 17, 18)と言う。

有様(移動)の動詞	“上”	空間詞
有様を意味する動詞	移りを意味する動詞	場所を意味する名詞

有様移動の動詞：“跑, 走”

位置移動の動詞：“上”

場所を意味する名詞：“前”

空間的な移り：“跑上前”「駆けつけた(走って前に来る)」、“走上前”「進み出た(歩いて前に出た)」、“走上前”「近づいて(歩いて前に来る)」

例(16)の「空間的な移りのむすびつき」を作る連語“跑上前”「駆けつけた」に用いられている有様移動の動詞“跑”は主体の有様によって移動「走る」を表している。単語レベルでも連語レベルでも「走る」の意味で訳されているので、「空間的な移りを示す基本動詞」である。しかし、位置移動の動詞“上”と方位詞“前”が訳されていない。例(17)の“走上前来”「進み出た(歩いて前に出た)」、例(18)の“走上前来”「近づいて(歩いて前に来る)」の“走”は主体の有様による移動を表しているが訳されていない。“上”は平面性移動による主体の移りを表している。移りを表す“上”も派生義である。方位詞“前”は主体の移るところであるが、やはり訳されていない。上掲の“跑上前”「駆けつけた(走って前に来る)」、“走上前”「進み出た(歩いて前に出る)」、“走上前”「近づいて(歩いて前に来る)」は中国語と日本語の対応関係が見られないので応用訳である。本稿では、これらの日本語訳を「空間的な移りを示せる応用訳」と言う。

2.1.4. 態度的な移りのむすびつき

例(19)(20)(21)の“找上门来”「彼を訪ねて」うちの“找”は主体の有様による移動を表しているので基本義である。“上”は「下から上に移動する」の意味を表す基本義ではなく、基本義の一局面「移る」の意味で用いられているので派生義である。“门”は主体の移るところである。“找上门”は態度的な移りを意味しているので、連語論的な意味では「態度的な移りのむすびつき」である。このように「移る」の意味で使われる“上”も一般には平面性移動である。この用法の“上”も角度性移動から解放され「移る」の意味の平面性移動に移行しているので、やはり派生義と言える。“来”は「来る」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。

iv. 態度的な移りのむすびつき:「空間領域のくみあわせ」のなかで、主体がある空間へ態度的に移ることを「態度的な移りのむすびつき」(例19, 20, 21)と言う。

有様(移動)の動詞	“上”	空間詞
態度を意味する動詞	移りを意味する動詞	場所を意味する名詞

有様移動の動詞:“找”

位置移動の動詞:“上”

場所を意味する名詞:“门”

態度的な移り:“找上门”「彼を訪ねて」「訪ねて」

例(19)の「態度的な移りのむすびつき」を作る連語“找上门”に用いられている有様移動の動詞“找”は主体の有様によって態度的な移り「訪ねる」を表している。単語レベルでも連語レベルでも「訪ねる」の意味で訳されているので「態度的な移りを示す基本動詞」である。“上”は単語レベルでは「行く」の意味を表しているが、上掲の“上”は不訳なので、派生義である。連語「動詞+“上”+空間詞」における位置移動の動詞“上”は、不訳になっているので、「態度的な移りを示せる派生動詞」と言う。“上”の対象となる“门”は単

語レベルではもの名詞だが、連語レベルでは場所を表す。このような空間詞を連語論では「場所を示せる派生空間詞」と言う。

典型的な「態度的な移りのむすびつき」は“找上朋友家”「友人の家を訪ねる」のようなヲ格の空間詞と態度的な移りを意味する動詞とに訳せる場合である。これを本稿では「態度的な移りのむすびつきを示す基本訳」と言う。上掲の“找上门”「彼を訪ねて」「訪ねて」は応用訳なので、この日本語訳を「態度的な移りを示せる応用訳」と言う。

2.1.5. うつしかえのむすびつき

例(22)の“拖上岸来”「岸に引き上げた」のうちの“拖”は主体の有様による移動を表しているので基本義である。“上”は「下から上に移動する」の意味を表す基本義ではなく、基本義の一局面「移す」の意味で用いられているので派生義である。“岸”は主体が客体を移しかえるところであり、客体は前の分文に現れている。“拖上岸”には客体が現れていないが、主体による客体の移しかえを意味しているので、連語論的な意味では「うつしかえのむすびつき」である。このむすびつきの中に用いる“上”には、主体の角度性や平面性の移動もなく、角度から解放されている。主体が客体をある場所に「移す」の意味を表すだけなので、“上”の派生義と言えるであろう。このむすびつきも場所に対する主体と客体の違いはあるものの、「移す」は場所に対する主体による客体の移しかえを意味する。このむすびつきは主体がある場所に「移る」の意味から主体による客体の移しかえの意味に派生した、と言えるであろう。“来”は「来る」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。

v. うつしかえのむすびつき：「空間領域のくみあわせ」のなかで、主体が客体をある空間からある空間に移すことを「うつしかえのむすびつき」(例22)と言う。

有様(移動)の動詞	“上”	空間詞
有様を意味する動詞	移しを意味する動詞	場所を意味する名詞

有様移動の動詞：“拖”

位置移動の動詞：“上”

場所を意味する名詞：“岸”

うつしかえ：“拖上岸”「岸に引き上げる」

例(22)の「うつしかえのむすびつき」を作る連語“拖上岸”に用いる有様移動の動詞“拖”は主体の有様によって移動「引きずる」を表している。単語レベルでも連語レベルでも「引きずる」の意味に訳されているので「うつしかえを示す基本動詞」である。“上”は単語レベルでは「下から上に移動する」角度性移動を表しているが、例(22)の“上”はうつしかえ先への到着を意味するので、派生義である。連語「“上”＋空間詞」における位置移動の動詞“上”は「移す」の意味なので、「うつしかえを示せる派生動詞」と言う。“上”の対象となる“岸”は単語レベルでも場所名詞であり、連語レベルでも場所を表す。このような空間詞を連語論では「場所を示す基本空間詞」と言う。例(22)の“拖上岸”に対応する「岸に引き上げる」は中国語と日本語とが対応しているので、この日本語訳を「うつしかえを示す基本訳」と言う。

(例7)から(22)までは出来事が2つに分けられる例文である。例(23)(24)(25)は出来事が3つ以上ある文である。例(23)の“趿着木屐上楼来”「木のサンダルをつっかけて階段を上がってくる」は、3分割「“趿着木屐”＋“上楼”＋“来”」できる。“趿着木屐”は有様を表している。“上楼”の“上”は「下から上にあがる」意味を表しているので基本義である。“楼”は角度性名詞であり、主体の移動するところである。“上楼”「階段を上がる」は主体の角度性移動を表しているので、連語論的な意味では上掲に挙げる「空間的な移動のむすびつき」である。“来”は「来る」の意味で用いられているので趨向移動の動詞であり、転移性を表している。出来事が3つある連述文でも一般には出来事の行われる順序により、文が拡大している。例(24)の“有好多他的崇拜者上

门来拜师求艺”「芸を身につけるために彼を師として仰ぐたくさんの崇拝者が訪ねてきた」は4分割「有様“有好多他的崇拜者”＋位置移動“上门”＋趨向移動“来”＋目的“拜师求艺”」できる。このうちの「有様“有好多他的崇拜者”」の客体“好多他的崇拜者”が「位置移動“上门”＋趨向移動“来”＋目的“拜师求艺”」の主体となっている。例(25)の“派新上任的主编上门来”「新任の編集委員長に訪ねさせた」は3分割「有様“派新上任的主编”＋位置移動“上门”＋趨向移動“来”」できる。このうちの「有様“派新上任的主编”」の客体“新上任的主编”が「位置移動“上门”＋趨向移動“来”」の主体となっている。例(24)(25)はともに兼語文である。このうちの“上门”「訪ねる」は連語論的な意味からいえば、態度的な移りを表すので、例(24) の“上门”は態度的な移りのむすびつきだが、例(25)の“上门”は構造の影響“派新上任的主编上门来”を受けて、「空間的な〈ひと〉の位置変化のむすびつき」を表している。“来”は「来る」の意味で用いられているので趨向移動の動詞であり、趨向性を表している。出来事が3つ以上ある兼語文でも一般には出来事の行われる順序により、文が拡大している。

2.1.6.「空間的な〈ひと〉の位置変化のむすびつき」

例(25)の“派新上任的主编上门来”「新任の編集委員長に訪ねさせた」のうちの“派”は主体の有様による位置変化を表しているので基本義である。“上”は「下から上に移動する」意味を表す基本義ではなく、基本義の一局面を表す移り「訪ねる」の意味で用いられているので派生義であり、角度から解放されている。“门”は主体が客体を位置変化させるところであり、主体は前の分文に現れている。“上门”だけであれば、「態度的な移りのむすびつき」を表しているのだが，構造に縛られて“派新上任的主编上门”は主体による客体の位置変化を表すので、連語論的な意味では「空間的な〈ひと〉の位置変化のむすびつき」である。このむすびつきの中に用いる“上”は、客体“新上任的主编”がある場所を「訪ねる」の意味を表すだけなので、“上”の派生義と言えるであろう。“来”は「来る」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、客

体の趨向性を表している。

vi．空間的な〈ひと〉の位置変化のむすびつき：「空間領域のくみあわせ」のなかで、主体が客体をある空間からある空間に位置変化させることを「空間的な〈ひと〉の位置変化のむすびつき」(例 25)と言う。

“派新上任的主编上”	空間詞
〈ひと〉の位置変化を意味する構造	場所を意味する名詞

有様移動の動詞：“派”

ひと名詞：“新上任的主编”

位置移動の動詞：“上”

場所を意味する名詞：“门”

〈ひと〉の位置変化：“派新上任的主编上门”「新任の編集委員長に訪ねさせた」

例(25)の「空間的な〈ひと〉の位置変化のむすびつき」を作る連語“派新上任的主编上门”に用いられている有様移動の動詞“派”は有様によって空間的な〈ひと〉の位置変化を表す。単語レベルでは「派遣する」の意味であり、連語レベルでは「～させる」の意味を表すので「空間的な〈ひと〉の位置変化を示せる派生動詞」である。“上门”の“上”は「訪ねる」意味を表す。“上门”だけだと「態度的な移りのむすびつき」だが、“上门”は構造に縛られ、主体による客体の位置変化を表すので、「空間的な〈ひと〉の位置変化のむすびつき」となる。“上”の対象となる“门”はもの名詞だが、ここでは場所を表す。このような空間詞を連語論では「場所を示せる派生空間詞」と言う。

上掲の“派新上任的主编上门”「新任の編集委員長に訪ねさせた」は応用訳なので、この日本語訳を「空間的な〈ひと〉の位置変化を示せる応用訳」と言う。

2.2.「動詞＋“上”＋空間詞＋“去”」の構造

本構造「動詞＋“上”＋空間詞＋“去”」は一般に次のような文中に用いら

れ、連語論的な意味を表すいくつかのむすびつきを作る。

(26) 他也就高高兴兴地爬上树去荡秋千了。(《童话》 p.185)

彼も嬉しそうに木をのぼって行くとブランコをした。(筆者訳)

(27) 她骑上一个小时的自行车去看望父亲。(《关于女人》)

……自転車に1時間乗って父を見舞った。(筆者訳)

(28) 马良装做没有听见，不歇手地画着风。海水发怒了，浪涛扑上船去了。(《童话》 p.39)

馬良は聞こえないふりをして、手を休めずに風を描いている。波は荒れ、大波が船に襲いかかっていった。(筆者訳)

(29) 白鸟飞上树去，衔了他为儿女储备的果子下来，给那落水者吃，那落水者感动得流着两行眼泪，挣扎着要向九色鹿和白鸟道谢。(《童话》 p.146)

白鳥は木に飛んで行くと、子どもたちのために蓄えておいた果実をくわえて来て、その水に落ちた者に食べさせた。その水に落ちた者は感動して涙を流し、心から九色鹿と白鳥にお礼を言った。(筆者訳)

(30) 皇帝杀了败将，又派第二名大将，带兵三万，攻上山去，要把山烧掉。(《童话》p.272)

皇帝は敗軍の将を殺すと、また2番目の大将に、兵3万を連れ、山へ攻めて行き、山を焼き払わせようとした。(筆者訳)

(31) 行者点点头，一个筋斗翻上天去了。(《童话》p.150)

行者が軽くうなずくと、金斗雲は空まで飛んでいった。(筆者訳)

(32) 不过人们还是怀念第一只飞上天去的猴子，她是宇宙航行的先锋。(《童话》p.267)

でも、人々は初めて空に飛んでいった猿を懐かしんだ。あの猿は宇宙飛行の先鋒なのだ。(筆者訳)

(33) 一阵大风刮过，把这个碰不得的纸小人，送上天去了。(《童话》p.627)

強風が吹いてきて、この破れ易いので触ることのできない紙で作っ

た小人を空へ飛ばして行った。(筆者訳)

(34) 小孔雀好奇地走上前去，问这个小姑娘："小姑娘，你心里有什么事不快活呀？ (《童话》p. 90)

小さな孔雀は好奇心で前に進み出ると、女の子に尋ねた。「お嬢ちゃん、なにか嬉しくないことがあるの？」(筆者訳)

(35) 爸爸别发愁，妈妈别流泪，我们追上前去，和他评一评理！(《童话》p. 252)

父さん心配しないで、母さん涙を流さないで、私たちが追いかけて行って、彼と白黒をはっきりさせるから。(筆者訳)

(36) 父亲凑上前去，看清了王文义奇形怪状的脸。(《红高粱》)

近づくと、王文義の怪物めいた顔が見えた。(『赤い高粱』)

(37) 他穿好长衫，闪出房门，蹑着脚走下楼梯，打算偷上街去。(《霜叶红似二月花》)

外出用の長上衣を着てそそくさと部屋を出、足音を忍ばせて階段を下りた。こっそりと出掛けてしまおうとしたのである。(『霜葉紅似二月花』)

(38) 象爸爸和象妈妈骑着自行车上班去了。(《童话》p. 222)

象のお父さんとお母さんは自転車で出勤した。(筆者訳)

(39) "你要救我们，应该救我们上对岸去，因为我们跳河的目的，是让人家送我们过河去。(《童话》p. 778)

私たちを助けてくれるなら、向こう岸へ行かせて、私たちが川へ飛び込んだ目的は川を渡ることなのだから。(筆者訳)

(40) 它越爱这孩子，越希望她的病能够快好，可是，它看见妈妈带了她上医院去了好几次，回来以后，她的腿仍然没有好。(《童话》p. 116)

それはこの子を好きになればなるほど、ますますこの子の病気が早く良くなることを願った。しかし、母親が何度この子を病院へ連れて行っても、やはりこの子の足は治らなかった。(筆者訳)

(41) 她想，为什么不想法子上房去看看，也许上面可以看到外面的情况。

(《青春之歌》)

なぜ、口実をつくって、高塀の上に登ってみないのか？上に登れば、外のようすがわかるに違いない。(『青春の歌』)

(42) 开学了，没等娘催促，我便踏上去学校的大路。(『人民』97-5-87)

だからこの時ばかりは、おふくろに尻を叩かれるより早く、授業が始まると早速学校に顔を出したのだ。(同上)

上掲中の例文に見られるように、位置移動の動詞“上”は「有様(移動)の動詞＋位置移動の動詞“上”＋名詞＋“去”」の構造を作り、名詞が場所を表すと、「空間領域のくみあわせ」を作る。この連語のなかで、有様(移動)の動詞は有様によって運動の方式を表し、“上”は位置移動を表し、名詞は場所を表す。“去”は視点のある移り動きを表す。例(26)から(37)までの「動詞＋“上”＋空間詞 ＋“去”」構造は連語の表す意味から「動詞＋“上”＋空間詞 」と“去”とに2分割できる。例(38)(39)の「動詞＋名詞＋“上”＋空間詞 ＋“去”」構造は、連語の表す意味から「動詞＋名詞」と「“上”＋空間詞 」と“去”とに3分割できる。さらに例(40)や(41)のように、その後に回数や目的を表す連語が用いられ、「動詞＋名詞＋位置移動の動詞“上”＋名詞＋“去”＋回数／目的」構造を作る場合もある。例(42)は形式的に見れば、「動詞＋“上”＋“去”」構造“踏上去”だが、「動詞＋“上”＋(“去”＋名詞＋“的”＋)名詞」構造“踏上(去学校的)大路”であり、他の例文とは構造が異なる。

上掲の例文を連語論的な観点から分析してみよう。なお、本節は2.1節で挙げた「動詞＋“上”＋空間詞 ＋“来”」構造のうちの“来”が“去”に代わっただけなので、同じむすびつきであれば、構造的なタイプと説明は省略する。

2.2.1. 空間的な移動のむすびつき

位置移動の動詞“上”の基本義は、「下から上に移動する」角度性の移動である。上掲に挙げる空間領域のくみあわせの中で、“上”がこの意味で使われる連語のくみあわせは、例(26)の“爬上树去”「木をのぼって行く」だけである。このくみあわせの中に用いる“爬”は主体のありさまによる移動を表し、

“上”は「下から上にのぼる」意味を表しているので、ともに基本義である。“树”は角度性名詞であり、主体の移動するところである。「“上”＋“树”　」「木をのぼる」は主体の角度性移動を表しているので、連語論的な意味では「空間的な移動のむすびつき」である。空間的な移動のむすびつきに用いる“上”は基本義であり、空間詞は必ず角度性の名詞である。“去”は「行く」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、主体の転移性を表している。

2.2.2. 空間的な着点のむすびつき

例(27)から(33)までの“上”は「到着する」の意味である。たとえば、例(27)の“骑上一个小时的自行车”「自転車に1時間乗って」、例(28)の“扑上船”「船に襲いかかる」のように、これらの“上”は主体が「到着する」の意味で使われている。“上”の客体となる「到着する場所」は角度性名詞“自行车, 船, 树, 山”と平面性名詞“天”なので、空間詞は角度から解放されていると言える。「“上”＋“自行车, 船, 树, 山, 天”」は客体への主体の到着を表しているので、連語論的な意味では「空間的な着点のむすびつき」である。この用法の“上”も角度性移動であるが、到着の局面しか表していないので、派生義である。“去”は「行く」の意味で用いられているので趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。

例(41)には4つの出来事“想法子＋上房＋去＋看看”がある。このうちの“上房”の“上”は「到着する」の意味であり、“上房”は「空間的な着点のむすびつき」を表す。その前の“想法子”は有様を表し、その後の“去＋看看”は趨向性と目的とを表している。

例(42)の“踏上去学校的大路”は“踏上去＋学校的大路”ではなく、“踏上大路”に“去学校的”が“大路”の限定語になっている複雑な構造である。“踏上大路”も客体“大路”への主体の到着を表しているので、連語論的な意味では「空間的な着点のむすびつき」である。“踏上”の“上”は「到着する」の意味なので、これも派生義である。“去”は「行く」の意味で用いられている趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。

2.2.3. 空間的な移りのむすびつき

例(34)(35)(36)の“上”は「進み出る」の意味である。たとえば、例(34)の“走上前”「前に進み出る」の“上”は角度性移動から解放された平面性移動であり、高低から前後への移行とみなせ、空間上の平面的な主体の移りを表している。連語論的な意味では「空間的な移りのむすびつき」である。この用法の“上”は角度性の移動から解放される平面性の移動に移行する意味「ある場所に移る」で使われているので、これも派生義である。“去”は「行く」の意味で用いられているので趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。

例(37)の“偷上街”の“上街”は離合動詞である。この用法の“上”も角度性移動から平面性移動の「行く」の意味で使われているので、これも派生義である。“去”は「行く」の意味で用いられているので趨向移動の動詞であり、主体の趨向性を表している。

例(38)(39)(40)は3つの出来事がある。このうちの「“上”＋空間詞“班,对岸,医院”」は「空間的な移りのむすびつき」を表す。その前の出来事“骑着自行车”などはいずれも空間的な移りの有様を表す。その後の“去”は趨向性を表し、例(40)の“去好几次”は回数を表す。

3. おわりに

本稿で対象とする“上”を用いて作る構造「有様(移動)の動詞＋位置移動の動詞“上”＋空間詞＋趨向移動の動詞“来/去”」は連語論的な意味のむすびつきから分析すれば、一般的には各むすびつきを作る連語「有様(移動)の動詞＋位置移動の動詞“上”＋空間詞」と視点のある移動を表す「趨向移動の動詞“来/去”」とに2分割できる。しかし、有様(移動)の動詞の後に客体があると3分割以上「有様(移動)の動詞＋客体」「位置移動の動詞“上”＋空間詞」「趨向移動の動詞“来/去”」またはさらに回数や目的などが加わる構造に分割される。一般には出来事が3つ以上ある文でも出来事の行われる順序によって文が拡大している。

単語の意味変化は奥田靖雄が多義語で指摘し詳述するように連語のむすび

つきの違いによって生じる。それを分かりやすく証明したのが、上記に示す鈴木康之の主張する「構造的なタイプ」である。本稿は中国語で二人の説の正当性を明らかにしたものである。

中国語ではむすびつきの違いは同じ動詞であれば、動詞のどの局面と空間詞とがむすびついているかによって意味変化が生じる。たとえば、“上”は「下から上へ移動する」という意味が基本義である。この意味で使う場合は「空間的な移動のむすびつき」を作る。「到着する」の意味で使う場合は「空間的な着点のむすびつき」を作る。「行く／来る」の意味で使う場合は「空間的な移りのむすびつき」を作る。「うつしかえる」の意味で使われていれば「うつしかえのむすびつき」を作る。連語のなかで動詞が基本義として使われていれば基本動詞であり、派生義として使われていれば派生動詞である。

「有様(移動)の動詞＋位置移動の動詞“上”」の客体は単語レベルでは場所名詞ともの名詞である。もの名詞であっても連語における上掲の各むすびつきのなかでは場所を表すことができる。単語でも場所を表し、連語の中でも場所を表す名詞であれば基本空間詞であり、単語では場所を表さず、連語のなかに入って空間を表す名詞であれば派生空間詞である。

「有様(移動)の動詞＋位置移動の動詞“上”＋空間詞」で作る連語も各むすびつきを表す基本的な意味であれば、「各むすびつきを示す基本訳」であり、派生的な意味であれば「各むすびつきを示せる応用訳」である。

以上の「有様(移動)の動詞＋位置移動の動詞“上”」とその客体にみられる基本義と派生義との関係、および連語に見られる基本訳と応用訳との関係から、「動詞＋“上”」がどのような形状の空間詞とくみあわさるかによって、いろいろな連語論的な意味を表す「むすびつき」が作れ、構造的なタイプで示すむすびつきの違いによって派生義が生じ、単語に意味変化が起きるというメカニズムが存在することが証明されたと言えるであろう。

奥田はむすびつきの違いにより日本語の動詞に意味変化が生じることを認めたものの、名詞に意味変化が生じることまで指摘するにいたらなかった。本稿では日中対照研究をすることにより中国語の動詞にも意味変化が起こり、名

詞にも意味変化が生じることを指摘し、これらを基本義と派生義とに分け、各むすびつきにも各むすびつきにおける基本訳と応用訳とがあることを指摘している。日本語研究者である奥田の理論と鈴木康之の主張する構造的なタイプの構築に倣いながら、日中対照研究を展開する中で、奥田の日本語面における不足を若干補え、日中対照研究でも奥田靖雄と鈴木康之の理論の正しさを証明できたであろう。

---

1) 高橋弥守彦(2000)以降、高橋は移動動詞を三類に下位分類している。しかし、この説は当時ほとんど認められていなかった。日中対照言語学会で「補語特集大会」(2003)が開催されてから、比較的認められるようになったようである。しかし、今でも一般には《八百词》説が広く行われている。

2) 高橋の言う異領域のくみあわせとは以下のようなくみあわせである。

上了车才想起忘了带件毛衣。(空間領域のくみあわせ)車に乗ってからセーターを忘れたことに気がついた。

不上几天，花就开了。(時間領域のくみあわせ)何日もたたないうちに花が咲いた。

今天上了不少货。(もの領域のくみあわせ)今日は品物がたくさん増えた。

车到了一站又上了几个人。(ひと領域のくみあわせ)車が次の停留所に着くと、また何人か乗ってきた。

上了两堂课。(こと領域のくみあわせ)2コマの授業をした。)

3) 高橋弥守彦(2007)では同一の文であっても、文意により“上”を動詞と介詞とに分けている。ちなみに、下記の文は“上楼去”が「階段を上っていった」の意味であれば、2つの出来事「空間的な移動のむすびつき“上楼”＋移動性“去”」からなる文であり、“上”は動詞である。“上楼去”が「2階／上に行った」の意味であれば、1つの出来事「空間的な移りのむすびつき“上楼去”」からなる文であり、“上”は介詞である。

他们上楼去了。(作例)

彼らは階段を上っていった。(筆者訳) 彼らは2階／上に行った。(筆者訳)

このほか、下記の文のように、文意が同じ場合であっても構造が違うと、“上”を動詞と介詞とに分けている。右の文の“上哪儿去找”は2つの出来事「空間的な移りのむすびつき“上哪儿去”＋目的“找”」であり、“上”は介詞である。左の文の“上哪儿找去”は3つの出来事「空間的な移りのむすびつき“上哪儿”＋目的“找”＋趨向性“去”」であり、“上”は動詞である。

現在大雪封山，上哪儿去找啊！(《童话》p. 939) / 現在大雪封山，上哪儿找去啊！
今は大雪で山が閉ざされているのに、どこへ探しに行くのよ。(筆者訳)

4) 下記の文は 3 つの出来事「有様“趿着木屐”＋位置移動“上楼”＋移動性“来”」からなる文である。

后来她听见阿栗趿着木屐上楼来，一路扑秃扑秃关着灯，她紧张的神经方才渐归松弛。(《顷城之恋》)

やがて阿栗が木のサンダルをつっかけて階段を上がってくる音がし、その途中でパチンパチンと電気を消す音が聞こえると、流蘇の張りつめた神経がようやく緩んだ。(『傾城の恋』)

この文は、下記の 2 つの出来事「有様“跑上楼”＋移動性“来”」や 1 つの出来事「有様“跑”＋位置移動“上”＋趨向性“来”」を表す文と文構造は違うが、移動動詞の観点「有様(移動)の動詞(＋場所名詞)＋位置移動の動詞＋趨向移動の動詞」から見れば同じ構造である。

她跑上楼来了。(作例)　彼女は走って階段をあがってきた。

她跑上来了。(作例)　彼女は走って上がってきた。

言語資料と略称

1. 人民中国(1988～1997)『人民』
2. 中国語常用動詞辞典(1995)『荒屋』
3. 中国語用例辞典(1992)『八百詞』
4. 語料庫(2003)　北京日本学センター『語料』
5. 中国当代优秀童话选(1991)柯玉生主编　新蕾出版社

参考文献

1. 荒川清秀(2004)「空間名詞と空間化」『国文学　解釈と鑑賞』第 69 巻 7 号　至文堂
2. 荒川清秀(2005)「中国語学から見た連語論(2)」『国文学　解釈と鑑賞』第 70 巻 7 号　至文堂
3. 荒屋勸(1995)『中国語常用動詞例解辞典』光生館
4. 大島吉郎(2005)「“V＋上”の意味解釈－心理的側面を中心に－」『語学教育研究論叢』語学教育研究所創立 20 周年記年号第 22 号　大東文化大学語学教育研究所
5. 奥田靖雄(1976)「言語の単位としての単語」『教育国語』45 号
6. 熊進(2003)「V＋“上”、V＋“下”について」『外国語学会誌』No.. 32　大東文化大学外国語学会誌

7. 呉大綱(2005)「中国語における連語論研究の展望」『国文学　解釈と鑑賞』第70巻7号　至文堂
8. 侯精一　徐枢　张光正　蔡文兰　编／田中信一　西槙光正　武永尚子　訳(2001)『中国语补语例释』商务印书馆
9. 鈴木重行　鈴木康之責任編集(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』言語学研究会編　むぎ書房
10. 鈴木康之(2004)「奥田靖雄の連語論」『国文学　解釈と鑑賞』第69巻1号　至文堂
11. 高橋弥守彦(2000)「“上”＋場所語の“上”について」『荒屋勸教授古希記念中国語論集』古希記念行事委員会編　白帝社
12. 高橋弥守彦(2003)「連語の構造的なタイプの一覧、動作の具体化の場合」『研究会報告・第24号』日本語文法研究会
13. 高橋弥守彦(2003)「位置移動動詞“上／下”と空間語の関係について」『外国語学会誌』No..32　大東文化大学外国語学会誌
14. 高橋弥守彦(2004)「動詞＋“过”＋空間名詞の中の“过”について」『日中言語対照研究論集』第6号　日中対照言語学会　　白帝社
15. 高橋弥守彦(2005)「中国語学からみた連語論(1)」『国文学　解釈と鑑賞』第70巻7号　至文堂
16. 田中茂範・松本曜著(1997)『空間と移動の表現』　研究社
17. 方美麗(2002)「連語論<移動動詞と空間名詞との関係>－中国語の視点から－」『日本語科学』11　国立国語研究所
18. 方美麗(2004)「中国語と日本語の空間表現」『国文学　解釈と鑑賞』第69巻7号　至文堂
19. 朴鐘漢著／遠藤雅裕訳(2000)「認知文法による現代中国語多義語の研究」『中央大学論集』第21号　中央大学
20. 朴貞姫(2004)「空間経路表現の日中対照」『日中言語対照研究論集』第6号　日中対照言語学会　白帝社
21. 朴貞姫・崔健(2005)『日朝中3言語の仕組み―空間表現の対照研究―』振学出版
22. 丸尾誠(2005)『現代中国語の空間移動表現に関する研究』　白帝社
23. 望月八十吉・高維先(1970)『中国語学習のポイント』　光生館
24. 森田良行(2004)「移動動詞と空間表現」『国文学　解釈と鑑賞』第69巻7号　至文堂
25. 刘月华主编(1998)《趋向补语通释》北京语言文化大学出版社
26. 吕叔湘主編　牛島徳次監訳・菱沼透訳 (1992)『中国語用例辞典』東方書店